

滝川第二高等学校 入学考查 問題

(一次) **国語** (五十分・百点)

注意事項

- 1 問題は1ページから15ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙は開いてはいけません。
- 4 考査番号を解答用紙と問題用紙に正しく記入しなさい。
- 5 解答用紙の※印の欄には記入してはいけません。
- 6 計算機能付き腕時計・電子辞書・携帯電話の持ち込みは禁止です。
- 7 「終了」の合図で鉛筆を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問い合わせよ。（指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含む）

食べるものがア~~ニ~~、という人々の現実に関して、我々はほとんど無知だと言つてよい。初めに私は、貧困の定義を示しておこう。

「貧困とは、その日、食べるものが無い状態」を言う。従つて日本には世界的なレベルで言うと一人も貧困な人がい~~イ~~ない。

私たちは一時的な空腹ならよく知つてゐる。食事を食べ^aソコねたり、レストランでなかなか注文のものが運ばれて來^bない時に感じる苛立ちである。しかしその場合、食事にありつくのは時間の問題だということが必ず私たちの意識の底にある。

しかし貧困から来る飢餓には、①解決のめどが立つていない。も

ともとその人が蓄財もなく特殊技能もなく、社会全体がまたどこを見廻しても金も物もないのだから、明日まで待てばどこから食料のさし入れがあるか、生活保護を受けられるようになるかもしけ~~工~~ない、という期待もない。村全体も親戚も皆が皆、ようやつと生きていく、というような社会である。

空腹と飢餓とは全く違う。空腹は一般的な状況をさすが、飢餓は社会的、経済的、かつ継続的状況だ。とにかく地域全体に食べものがない。昨日もなかつたし、明日も多分ないだろう。日本の貧乏は、その家一軒だけの不運の結果である。だから兄弟や、友だちが

幸運なら、何とか飢え死にさせるようなことはしない。しかし飢餓は地域全体の瀕死の病状である。中央政府も地方自治体も（そんなものが名称以上に実体を持つてゐるかどうか疑問だが）何らこうした飢餓を救済する方法を持た~~オ~~ない。金も物も組織力も、何も持つてない自治体と役人たちなのだ。

一番おかしいのは「子供の人権」という発想である。子供の人権とは、わかつてゐるようでいて実体のない言葉だ。子供を可愛がつてその幸福を第一に考える、他人の子供であつてもその存在が気になる、ということならよくわかる。しかし②私が歩いた世界で、子供の人権などというのは「浮いた言葉」である。

子供の人権を言う人にいつか素朴な質問をしたことがあつた。

「誰が子供の人権を守るんですか？」

「もちろん親です」

「親が食べ物も与えられず、もちろん学校へもやれなかつたら？」

彼らが生きているのは、何しろ学校まで仮に十キロ離れていても、歩く以外に路線バスもない社会である。自転車など~~I~~古自転車と雖も、全く無縁の経済状態の人たちだ。

「親ができなかつたら、社会です」

「社会が全く~~b~~ヨユウがなかつたら？」

「政府です」「政府が義務教育もできず、貧困救済のいかなる予算も持つていなかつたら？」

相手は返答しなかった。そういう事態を想定する私を□と

思つたのかもしれない。確かに一九九〇年九月二日に発効した「児童の権利に関する条約」の前文を見ると次のような文章がある。

「児童が、その人格の完全なかつ調和のとれた発達のため、家庭環境の下で幸福、愛情及び理解のある^c霧囲氣の中で成長すべきであることを認め、

児童が、社会において個人として生活するため十分な準備が整えられるべきであり、かつ、国際連合憲章において宣言された理想の精神並びに特に平和、尊厳、寛容、自由、平等及び連帯の精神に従つて育てられるべきであることを^d考慮」

することが決められている。

理想は高いほうがいい、とも言えるが、これは現実から□Ⅱ

遠いものだから、読後は沈黙するか、深い絶望に捉えられるかする他はない。ことに平和、尊厳、自由、平等に至つては、そうした貧困地帯には、その片鱗^{へんりん}すらない。

「アフリカには、生れてこの方、平和というものをまだ一度も見た

ことがない人がいるんです。だから平和とはいかなるものかを想像することもできない。人間、見たこともないものは望むことはできないんです。そうじゃありませんか、ミセス曾野^{その}」

と言われたこともある。動物に近い小屋に寝ている人たちに尊厳は果たしてあるか。

彼らには自由もない。移動の方途がないのだから、隣村までもめつたに行かない。用事があれば十キロでも二十キロでも歩いて行く脚力はあるが、十キロ行つても二十キロ行つても、そこに別の町や親戚の家があるというわけでもない荒野だとしたら、誰もそんな距離を歩きはしないだろう。移動さえ自由にならない人に、教育や旅行や居住の自由など考えられない。

つい先月、南インドで見た不可触民^{ダーリット}の家族は六畳ほどの床に八人が折り重なつて寝ていた。しかし別に不幸ではない。不可触民は不可触民であることを自他共に強く意識するところで生きている。いい悪いではない。それが生の現実である。上級階級^{カースト}は不可触民の社会的向上など望んでいない、とインド人が解説する。不可触民が今のまま、低賃金で使える労働力として存在することこそ彼らの繁栄や安樂に繋^{つな}がるからである。もちろんごく少数の人道的な人がいないうではないだろうが、③それは現実の社会の中で改革の力には成り得ていません。平等などというものは言葉としては存在するが、全く現世にはありえない観念である。

*第三の解決法「盗み」はもつとも早い物質（パンとか貨幣とか）の移動方法だ。許可も認可もいらない。誰からでもいい。だからほんとうに今日食べるもののない人のことを考えると、盗みを完全に否定することが私にはむずかしくなる。

空腹は一時的状態だから、食べればすぐに解決するが、④飢餓は

根が深い。

【曾野綾子『貧困の光景』より】

※ 第三の解決法：飢餓の解決法として「水でも飲んで寝る」「乞食をする」「盜む」の二つの方法を述べている。

問一 —— 線部 a ~ d で、漢字はその読み方を平仮名で、カタカナ

は漢字に直せ。（漢字は楷書で正しく書くこと）

問一 空欄 I • II に当てはまるごとばを、次のア～カ

からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書け。

- ア わざかに イ すぐに ウ やがて
エ いかなる オ あまりにも カ それでも

問三 —— 線部ア～オの中で、品詞の異なるものを一つ選び、その記号を書け。また、その異なるものの品詞名を漢字で書け。

問四 —— 線部①とあるが、それは飢餓にある社会がどのような社会だからか。本文中から三十字で探し、初めと終わりの五字を抜き出して書け。

問五 —— 線部②とあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 筆者が歩いた社会は、子供の人権を論じることのできるようゆとりのある社会ではなかつたから。
イ 筆者が歩いた社会は、子供を可愛がつてその幸福を第一に考えるような社会だつたから。

- ウ 筆者が訪れた社会は、子供の人権が守られているので、ことうら人権を話題にする社会ではなかつたから。

- エ 筆者が訪問した社会は、難しい話題を意識してさけるような社会だつたから。

- オ 筆者が目についた社会は他人の子供の人権が守られているかを気にする社会だつたから。

問六 空欄 □ に当てはまるごとばとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 非公式 イ 非常識 ウ 無計画

- エ 不相応 オ 不始末

問七　——線部③とあるが、その理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 人道的な考え方で、インドの社会の不合理を明らかにすることは、インドの社会に衝撃を与えるから。

- イ 人道的な考えは、インドの社会を成り立たせるためには、必要のない考えだから。

- ウ 人道的な考えは、不可触民の立場に納得して生きている不可触民の考え方を改めさせることになるから。

- エ 上流階級の繁栄や安楽に繋がる不可触民が必要以上に増えると社会が成り立たなくなってしまうから。

- オ 不可触民の中から自分たちの立場を改善しようという運動がこれまでには起きてこなかつたから。

問八　——線部④「飢餓は根が深い」とあるが、筆者がこのように述べるのは、飢餓がどのようなものであるからか。次の□に当てはまることばを本文中から十五字で抜き出して書け。

飢餓は空腹と異なり□のものであるから。

問九　この文章で筆者が特に述べたかつたこととして、最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 世界のどこで暮らしていても、高い理想を持ち、その理想の実現のために全力を尽くすべきである。

- イ 世界はさまざまだが、人々の心情には共通するものがあるので、理解し合うことが可能である。

- ウ 世界はさまざまであり、その中での人々の価値観もさまざまなので、言葉の重みも国によつて異なる。

- エ 世界には解決できない貧困という問題もあるので、私たちはそれには目をつぶつても仕方がない。

- オ たとえ善意からの行動であつても、人によつては悪意にとられることがあるので慎重に行動すべきである。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。（指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含む）

「えつ」

組みたない言うんなら、あんたにも新津小学校に行つてもらうで」「えつ」

兎一郎がはじめて狼狽した。「銀大夫師匠、それは……」

「いやか」

「困ります」

「そんなら、健と組みなはれ」

銀大夫は、「話は終わり」と手を振った。亀治はにこにこと笑つている。鏡台に向かつて幸大夫が、※床本に顔をうずめるようにして肩を震わせている。健はまったくわけがわからず、室内に居合わせた面々を見まわした。

「おい」

と、兎一郎が健に向かつて言つた。かすれを通りこして、潰れた津小学校に通つている。大夫、三味線、人形から一人ずつ派遣され、小学生にそれぞれ実技指導するのだ。

「どや、楽しくやつとるか」

「はあ、まあ……」

健は学校という場所があまり好きではなかつたが、小学生たちは熱心に義太夫を語る。それでなんとなくほどされて、一年ほどは率先して指導役を買ってでていた。

「そうかそうか」

と銀大夫は②満足そうにうなづいた。「兎一郎、あくまでも健と

組みたない言うんなら、あんたにも新津小学校に行つてもらうで」「えつ」

兎一郎がはじめて狼狽した。「銀大夫師匠、それは……」

「いやか」

「困ります」

「そんなら、健と組みなはれ」

銀大夫は、「話は終わり」と手を振つた。亀治はにこにこと笑つている。鏡台に向かつて幸大夫が、※床本に顔をうずめるようにして肩を震わせている。健はまったくわけがわからず、室内に居合わせた面々を見まわした。

「おい」

と、兎一郎が健に向かつて言つた。かすれを通りこして、潰れた津小学校に通つている。大夫、三味線、人形から一人ずつ派遣され、小学生にそれぞれ実技指導するのだ。

「どや、楽しくやつとるか」

「はあ、まあ……」

健は学校という場所があまり好きではなかつたが、小学生たちは熱心に義太夫を語る。それでなんとなくほどされて、一年ほどは率先して指導役を買ってでていた。

「そうかそうか」

と銀大夫は②満足そうにうなづいた。「兎一郎、あくまでも健と

請けあつた。あとは無言のまま、一礼して楽屋を出ていく。健はしばし迷つたが、思いきつてあとを追つた。

「兎一兄さん」

楽屋にいる、と言つたのに、兎一郎はさっそく食堂のほうへ向かつていた。健をちょっと振り返つたが、足は止めないまま食堂に入り、冷蔵庫からプリンを出す。自分用に買い置きしてあるらしい。噂は本当だつたのか、と思いながら、健は兎一郎に向かいの席に座つた。

朝の食堂内には、うどんをする大夫が一人いるだけだつた。健と兎一郎の組み合わせを見て、「めずらしいな」とちらつと眉を上げてみせる。健は先輩の大夫に会釈し、プリンを食べる兎一郎のまえで姿勢を正した。

「師匠が無理を言つてすみません」

兎一郎は黙々と、プラスチックの小さなスプーンでプリンをすくつている。健はひるんだが、言葉をつづけた。

「俺と組んだら、兎一兄さんにいい役がまわつてこなくなる。それは申し訳ないと思います。でも、頑張りますから、どうかよろしくお願ひします」

テーブルに額がつくほど、頭を下げる。協調性のなさそうな兎一郎の性格は、健にはどうも理解しかねる。だが、恒常にコンビを組むと決まつたからには、少しでも歩み寄りたかった。⁽³⁾ 気むずか

しい兎一郎に振りまわされ、稽古が疎かになるのは絶対に_bサけたい。せつかく劇場に足を運んでくれた客のままで、中途半端な義太夫を語りたくなかつた。

「そういうことじやない」

兎一郎がぼそつと言つたので、健は身を起こした。兎一郎は困つたように、手もとのプリンに視線を落としていた。

「役にいいも悪いもないだろう。どの役だつて大事だ」

⁽⁴⁾ 健は少しうれしくなつた。健が語るのは、ほとんどが冒頭の

※端場か、大夫と三味線が床にずらつと並ぶ※景事だ。物語的に重要な場を任されるまでには、まだまだ長い道のりがある。そんな健といつも組むということは、兎一郎も大曲や難曲から遠ざかることを意味する。兎一郎は、己れの実力と見合わない、格下の大夫がいやなのだろう。健はそう思つていたのだが、どうやらちがつたようだ。

あれ、でも待てよ。健は椅子に腰を落ち着け、ゆっくりと考える。どんな役でも不満はない、ということは。兎一兄さんの不機嫌の理由はやっぱり、ひたすら俺とは組みたくないから、つてことになるんじやないか？

歩み寄れるかもしれない、と喜びに沸いた心が、とたんにしほんだ。健ががつかりして肩を落とした気配を、兎一郎は察したらしい。「それに、六月は『油地獄』の河内屋内の段だらう」

「はい。出だしのところですけど」

「それだつて、大きな役に変わりはない」

兎一郎は居心地悪そうに、スプーンでプリンを突いた。「きみ個人

人に対して含むところがあるわけじゃない。気にしないでくれ」

もしかしてこのひと、ひとつづきあいに閑してものすごく無器用なだけかもしれない。^⑤健がそう思つたのは、それが最初だつた。

開演ブザーが鳴るのを機に、健は席を立つた。「じゃ、あとで呼びにいきます」と言うと、兎一郎はわざかにうなずいてみせた。

樂屋に戻つた健は、「本日の※蝴蝶蘭^{こちょうらん}」を運んだり、床本をさらい直したりと、忙しい時間を過ごした。健の出番は、午後の部の二つ目の演目だ。それにあわせて昼食を摂つた。満腹でも空腹でも、声はうまく出ない。出番の一時間ほどまえに、食堂で素うどんを食べるぐらいが、健にはちょうどよかつた。

健と兎一郎がしばらくコンビを組む、という話は、仲間内にあつ

といふまに広がつたようだつた。いまさらあとに引けないように、

銀大夫が言いふらしたのだろう。うどんをすすつていると、大夫と

三味線のみならず、人形遣いにも声をかけられた。

「よう、健。兎一兄さんと組むことになつたんだつて?」

「苦勞させられるでえ」

「ええ修業になるやろ。ぶつかつていけ」

はい、はい、と返事をしつつ、あわただしく昼飯を終えて樂屋に

戻る。午後の部の最初の演目が、銀大夫の出番だ。

舞台ではいま、幸大夫が『菅原伝授手習鑑』の「寺入りの段」を語つてゐる。スピーカーから樂屋に流れる幸大夫の声は、寺子屋に子どもを預けた女が去つていくシーンに差しかかろうというところだ。銀大夫はそのあとにつづくシーン、「寺子屋の段」を語る。

銀大夫は、もう何十年もそうしてきたのだろう。淡々と浴衣から※袴に着替えた。さりげなく流れるような動作だが、健はいつもこのとき、師匠から激しい気迫があふれでるのを感じる。銀大夫が肩衣^{かたぎぬ}をつけ、最後に袴^{はかま}を穿いた。畳に膝をついた健は、タイミングを^cノガさず、うしろから腕をまわして袴の紐^{ひも}を差しだす。

しっかりと紐を締め、隙なく着付けを終えると、銀大夫は樂屋に正座した。畳に手をつき、銀大夫は出番前の挨拶をする。もちろん、^⑥師匠である銀大夫が健に向かつて頭を下げるのなど、このときだけだ。

「おねがいします」

「ご苦労さまです」

と、健も両手をついて丁寧に返した。舞台で自分の身になにかあつたら、あとを頼む、という意味の挨拶だ。半ば形骸化した慣習だが、銀大夫はいつも、「今日が最期^{さいご}」という真剣さで挨拶する。芸にかける思いの深さと激しさが伝わつてくるから、健は^d扇子^{せんし}で何度はたかれようとも、銀大夫についていこうと決めてゐる。

銀大夫は大切に床本を捧げ持ち、楽屋の通路から舞台裏に出た。

健もそのあとに付き従う。出語り床の裏手では、銀大夫とそろいの袴をつけた亀治が待っていた。

張りつめた空気のなか、銀大夫と亀治は口をすすぎ、清めの塩を撒く。なにも言葉を交わさぬまま、二人は並んで盆に座った。床の表で幸大夫が、「振り返り見返りて、下部」と語り、湯澤野助の三味線がオクリを奏でる。

銀大夫が気合いをこめ、「はつ」と合団を送った。黒衣姿の床世話が、二人がかりで盆をまわす。床の盆がくるつとまわり、銀大夫と亀治が床の表へ出た。場内から盛大な拍手が湧くのが聞こえる。同時に、出番を終えた幸大夫と相方の野助が、床の裏へと戻ってきた。

「お疲れさまです」

盆から下りる幸大夫に、健は小声で言つた。幸大夫はうなずき、肩衣をはずす。休む間もなく、幸大夫は袖から出語り床の横手に出ていった。一番弟子の幸大夫は、師匠の語る姿を間近で見ることを許されている。

健はまだ、床の裏で銀大夫の語りに耳をそばだてるしかない。幸大夫の肩衣を超特急で楽屋の衣紋掛けにかけにいき、また超特急で床の裏に戻る。

『菅原伝授手習鑑』は名作と言われ、特に「寺子屋の段」は人気

が高い。だが健は、この段があまり好きではなかった。菅原道真の息子の首を差しだせ、と命ぜられた大人たちが、身代わりにふさわしい子どもを必死になつて物色する話だからだ。いくら主君の子を助けるためとはいえ、そりやないだろ、と思う。

だけど⑦師匠が語ると、なんでか泣けるんだよなあ。床世話に気づかれないように、健はこつそり鼻をすすつた。

床からは、銀大夫のしゃがれた、しかし深みのある声が響いてくる。寺子屋を営む夫婦が、預かっている主君の子の代わりに、新しく入門した子の首を差しだそうと決めたところだ。「鬼になつて」と語る銀大夫の声から、尋常ではない決意を固め、凄絶な顔で目と目を合わせる夫婦の姿が、ありありと浮かんでくる。

もし俺が、寺子屋の夫婦と似たような立場になつたら、どうするだろう。健は薄暗い床の裏で想像をめぐらせる。この話の登場人物たちは、忠義のために子どもを殺そうとしている。忠義のため、か。銀大夫師匠の命を助けるかわりに、新津小学校のミラちゃんを殺せ、と言われるようなものかな。

健はそう考え、すぐに「ありえない」と打ち消した。小学三年生のミラちゃんは、義太夫を語るのが大好きだ。健が東京公演に出ているあいだも、メールで熱心に質問事項を送つてくる。そんなミラちゃんを、銀大夫を助けるために殺すなんて論外だ。『仮名手本忠臣蔵』にも、「勿体ないが父様は、非業の死でもお年の上」という

台詞せりふがある。師匠には悪いが、ここは老体のほうを見殺しにさせてもらおう。

でももし、と健はさらに考える。文楽の神さま、いや、文楽の悪魔が俺のまえに現れて、「おまえに義太夫の真髓えさを会得させてやる。そのかわり、ミラちゃんを殺せ」と言つたら?

ばかりた前提だが、健は数瞬、自分が迷うのを感じた。(8) そんな自分を、得体の知れない怪物のように、恐ろしく感じた。

銀大夫の語りには、もしかしたら、と思わせる力と心情が籠もつている。俺ももしかしたら、自分にとつて大切だと思い定めたものと引き替えに、だれかの命を差しだしてしまえるのかもしれない。狂気に近い昏くらい信念が、俺の芯しんを貫いているのかもしれない、と。健は物思いを振り払つた。いまはなにより、師匠の語りの技を盗むのが肝心だ。師匠の芸に少しでも近づくべく、健は銀大夫の語りに意識を集中させた。亀治の三味線が、銀大夫の間を生かしながら、冴さえ冴さえと糸を震わせている。

気配を感じて振り向くと、「寺子屋の段」の奥を語る大夫と、兎一郎が立っていた。健は体をすらし、出番を控えた二人に場所を明け渡す。兎一郎は健に目もくれなかつた。舞台に向けて、極度に集中しているのだろう。全身から、殺気に似た空気が静かに立ちのぼつている。左手に持つた三味線が凶器のようだ。

【三浦 しをん『仮果を得ず』より】

※ 義太夫…三味線を伴奏に使つて語る語り手。

※ 床本…義太夫などで、語り手が公演の際に台の上に置いて使用する本。

※ 端場…淨瑠璃の各段の発端となる場。

※ 景事…人形淨瑠璃で、音楽や舞踊を主体にする部分。

※ 胡蝶蘭…胡蝶蘭はラン科植物。舞台のお祝いに贈られることが多い。

※ 緋…和服での男子の正装の一つ。

問一――線部a～dで、漢字はその読み方を平仮名で、カタカナは漢字に直せ。(漢字は楷書かいしょで正しく書くこと)

問一――線部①について、銀大夫は何のことを言つてゐるのか。それを説明した次の□に当てはまる」とばを、本文中から四字でぬき出して書け。

健が小学校で行つてゐる□のこと。

問三 ——線部②の熟語の組み立てと同じ組み立ての熟語を次のア

（オから一つ選び、その記号を書け。

ア 物価 イ 難易 ウ 映写

エ 延期 オ 日没

問四 ——線部③について、兎一郎の本心はどのようなものか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 物語的に重要な役を任されるよりも、それ以外の役で全力を注ぎたい。

イ 周りがもつてている自分の印象をよいものにして、よくない噂をなくしたい。

ウ 自分の実力に見合わない役に納得できず、健に自分の実力を見せつけたい。

エ 健と組むことそのものに特別な思いはなく、常に与えられた役に徹したい。

オ 自身の技の向上だけに力を入れるのではなく、自分の手で健を成長させたい。

問五 ——線部④について、健が少しうれしくなったのは、どんなこと

が誤解だったとわかったからか。それを説明した次の□aと□bに当てはまることばを、それぞれ五字で本文中から抜き出して書け。

兎一郎が健といつも組むということは、□aから兎一郎が遠ざかることを意味するので、健は、兎一郎が自分の実力と見合わない□bと組むのがいやなのだろうと思っていたこと。

問六 ——線部⑤について、健がそう思ったのはなぜか。その理由

として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 健に対する兎一郎の対応が、ぶつきらぼうだが心のこもつたものだつたから。

イ 兔一郎が健のことを誤解していたことを、自身の口で正直に語つてくれたから。

ウ 兔一郎が、いつもと変わりない態度で、健に丁寧に対応してくれたから。

エ 兔一郎が健に対して、自分がひとづきあいが苦手であることを打ち明けてくれたから。

オ 兔一郎の話を聞いていて、芸に対する真剣さがひしひしと伝わってきたから。

問七　——線部⑥について、この挨拶とそれに対する健の行動について説明した次の□a・□bに当てはまることばを、

□aは二十一字、□bは九字でそれぞれ本文中から探し、それぞれ初めと終わりの三字を抜き出して書け。

銀大夫が舞台に出る前の、半ば形骸化した慣習で、自分がこれから出る□aという意味の挨拶だが、芸にかける銀大夫の□bが健には伝わつてくるので、健も両手をついて丁寧に挨拶している。

問八　——線部⑦について、健が師匠の語りに心を動かされるのはなぜか。その理由を説明した次の□a・□cに当てはまることばを、□aは十五字、□bは九字で、それぞれ本文中から抜き出して書き、□cは後のア～オから一つ選び、その記号を書け。

銀大夫の□aによる語りからは、登場人物の様子がきて、もし自分がその登場人物だったら、と思わせる□cが感じられるから。

ア 恐怖　イ 気迫　ウ 苦しみ
エ 悲しみ　オ 気配

問九　——線部⑧について、健はどんなことを恐ろしく感じたのか。それを説明した次の□に当てはまることばを、本文

中から五字で抜き出して書け。

□に命令されたら、もしかしたらその命令に従つてしまふかもしれない、自分が思ったこと。

問十 この文章について説明したものとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 若い後継者を育てることに力を入れている伝統芸能の世界を描きながら、どの世界でも後継者を育てるという難事に直面していることがわかる内容になっている。

イ 伝統芸能の文楽の世界のしきたりの難しさにとまどう健の姿を通して、普通の世界とは異なる伝統芸能の世界についての知識を得られる内容になっている。

ウ 伝統芸能の文楽の世界でも最も大切なのは人間関係を良好に保つことであり、普通の社会と何ら変わることがないことを丁寧に説いている。

エ 伝統芸能の文楽の世界で日々精進を重ねる健の姿を丁寧に描きながら、文楽の世界の裏側の様子を知ることができる内容になっている。

オ 若者と先輩の心のすれ違いを描きながら、伝統芸能の世界をきわめることに精進する人々の姿と奥の深い伝統芸能の世界を見るができる内容になっている。

問十一 「全身から、殺氣に似た空気が静かに立ちのぼっている。左手に持った三味線が凶器のようだ」についての説明として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 自分と組みたくなかったであろう兎一郎に無理に組んでもらったという、健の兎一郎に対する引け目から来る怖れや恐怖の気持ちを暗に示している。

イ 「寺子屋の段」の奥を語る大夫と兎一郎の二人が組むときには、兎一郎の緊張の度合いが普段よりもっとさらに強くなるということを表現している。

ウ 出番を控えた兎一郎が、周囲の状況など全く意識せず舞台のことに没入している様子を端から見ると、すこみが感じられるということを表している。

エ 兎一郎が健のことを完全に無視し、舞台に集中している様子を描くことで、兎一郎と健の実力の差がやはり大きいということを暗に示している。

オ 出番直前の兎一郎が、健や周囲の物事に意識を向けないよう集中力を高めている様子が、健から見ると恐ろしく感じられるということを表している。

問十二 演目が上演されている場面での健の思いを説明したものとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 演目の登場人物の置かれた状況に自分を重ね合わせ、物語の内容や真髓をより深くみ取ることで、自分の芸の肥やしにしようとしている。

イ 健のことを気にかけていない兎一郎のことが気になり、やはり兎一郎は自分と組みたくなかったのではないかという不安を感じている。

ウ 師匠の語りを床の裏で耳を澄まして聞き、ついつい心を動かされる思いを味わいながらも師匠の語りの技を盗もうと心がけてしている。

エ 自分にとつて大切なないと、だれかの命を比較して躊躇した自分に嫌悪感を抱き、文楽に携わる資格があるのか、自問自答している。

オ 裏方での仕事を懸命にこなすことに精一杯で、銀大夫の語りを味わう時間などなく、今は自分の持ち場に徹することに専念している。

三 次の文章を読んで、後の問い合わせよ。（指定された字数には、

句読点その他の符号も一字として含む）

※横川の※恵心僧都の妹、安養の尼上あんようの尼上あまうもとに、強盗入りて、あ

るほどの物の具、みな取りて※出ければ、尼上は※紙衾かみふすまといふ

ものばかり、ひき着て①ふられたりけるに、姉尼のもとに※小尼上おととてありけるが、走り参りて見れば、※小袖こそでをひとつ落したりけるを、「これ落して侍るなり。②奉たてまつれ」とて、もて来たりければ、

「それを取りてのちは、③わが物とこそ思ひつらめ。主の※心ゆか

ぬものをば、④いかが着るべき。⑤いまだ、よも遠くは行かじ。

※とくとく⑥もておはして取らせ給たまへ」とありければ、門戸かどのかた

へ走り出でて、⑦「やや」と呼び返して、「これを落されにけり。たしかに奉らむ」といひければ、盜人とうじんども立ちどまりて、しばし案

じたる氣色にて、「悪しく参りにけり」とて、取りけるものどもを、さながら返し置きて、帰りにけり。

【十訓抄】より

- ※ 横川：比叡山ひえいざんにある地名。
- ※ 惠心僧都：天台宗の高僧。
- ※ 出でければ：出ていたので。
- ※ 紙衾：紙で作つた夜具。

- ※ 小尼上とてありけるが：小尼上こにしうという尼が仕えていたが。
- ※ 小袖：袖の小さいふだん着。
- ※ 心ゆかぬ：納得がいかない。
- ※ とくとくもておはして：早く早く呼び返しておやりなさい。

問一——線部①・⑥を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書け。

問二——線部②の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 私にください イ お召しください
- ウ 差し上げなさい エ ご覧ください
- オ ご確認ください

問三——線部③について、誰の思いを推測しているのか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 惠心僧都 イ 安養の尼上 ウ 小尼上
- エ 盗人ども オ この文章の筆者

問四——線部④について、どういう意味か。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア どうして着ることができよか、着ることはできない。
- イ どうして着ないのか、着てもかまわない。
- ウ 着ても文句はないだろう、でも着たくない。
- エ どのように着ればよいのか、着方がわからない。
- オ 着ていたものかもしれない、でも覚えていない。

問五——線部⑤について、どういう意味か。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 盗人は、きっと道に迷つているだろう。
- イ 盗人は、もう遠くへ行つてしまつただろう。
- ウ 盗人は、まだ遠くへは行つていないだろう。
- エ 盗人が遠くへ行つても小尼上なら追いつけるだろう。
- オ 小尼上なら、きっと盗人を呼びもどせるだろう。

問六 一線部⑦について、呼び返されて小袖を渡された盗人たちの後悔が読み取れることばを、本文中から八字で抜き出して書け。

問七 本文の内容を要約した次の□a・□bに当てはまることばを、□aは三字、□bは四字で、それぞれ本文中から抜き出して書け。

安養の尼上は、盜んだ物であつても、ひとたび□aとしたのならば、その物はその人の所有物だと考える人だった。この考えが□bの心を改めさせることになったと言える。

問八 「十訓抄」は鎌倉時代に成立した作品だが、同じ時代に成立

した作品を、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 枕草子まくらのそうし
- イ 源氏物語げんじものがたり
- ウ 万葉集まんようしゅう
- エ 新古今和歌集こきん
- オ 古今和歌集

